

作家カフカの誕生

奥田 誠司

1

1912年9月22日の夜から23日の未明にかけて、「恐るべき緊張と喜びをもって、まるで水のなかを前進するように」(T183)、一气呵成に書きあげられた『判決』(*Das Urteil*)は、カフカの文学的突破と見なされている。作者自身、「この物語は本物の誕生のように汚物や粘液に覆われて、ぼくのなかから生まれてきた」(T186)と認めているように、『判決』によってカフカは初めて独自のスタイルをつかみ、作家としての自己意識に目覚めたのである。

物語は若い商人ゲオルク・ベンデマンがロシアにいる友人に、自分の婚約を知らせる手紙を書き終えた場面からはじまる。彼はその手紙をもって、長いあいだ足を踏み入れたことのなかった父親の部屋を訪れる。ゲオルクの部屋が春の陽射しに照り映えて明るいのに対して、廊下を挟んで反対側にある父親の部屋は、狭い中庭の向こうに立つ塀に遮られて異常に暗い。父は亡き母の形見を飾りつけた片隅の窓ぎわにすわって、新聞を読んでいた。テーブルの上には、あまり食べたようには見えない朝食の残りが載っている。2年前に年老いた父親から事業を引き継いだゲオルクは、従業員を倍に増やし、店の売り上げも5倍に伸ばした。それとは対照的に、父親はあらゆる交流関係から退いている。ところが、ゲオルクは自分のほうに歩み寄ってくる父の姿を見て、「お父さんは相変わらず巨人だな」(E26)と感嘆する。

ゲオルクの友人は故郷での暮らしに満足できず、数年前にロシアへ逃走した。彼はペテルブルクで商売をはじめますが、そのうち振るわなくなり、「顔の黄色い肌色」(E23)は進行しつつある病気の気配を窺わせる。友人はペテルブルクに住む同国人やロシア人とも交友を深めることなく、

頑なに孤独を守り、生涯独身を通そうと決意している。カフカは日記のなかで、家族から孤立した状況を、「ヨーロッパにとってあまりにも孤独なので、ロシア的としか呼ぶことができないような体験」(T146)と表現している。また、『カルダ鉄道の思い出』(*Erinnerung an die Kalda-bahn*)の草稿でも、「生涯のある時期、私はロシアの奥地にある小さな鉄道の雇員をしていたことがある。私はあの地にいたときほど、孤独だったことはない。当時私はそのような場所を求めている。孤独がひしひしと身に迫れば迫るほど、それほどいっそう快かった」(T263)と記されているように、「ロシア」というイメージは、カフカが「書くこと」のために必要とした極度の孤独と結びついている。

カフカは自己の願望を複数の登場人物に対比的に分身化する技法を用いており、ロシアの友人とは、いわば作者の文学的志向が仮託された形象である。この友人のモデルには、東欧ユダヤ人のイディッシュ語劇団座長イツハク・レーヴィ (*Jizchak Löwy*)の面影が生かされている。この劇団は1911年9月にワルシャワから来演し、翌年1月までプラハに滞在した。カフカはその公演の場となったカフェ・サヴォイに足繁く通い、劇の印象や俳優たちの演技の様子を詳細に書き留めている。舞台装置や演技の質など、いずれをとっても粗末な代物であったが、彼はいたく感銘を受けている。現実の登場人物がわずかふたりの『判決』は、小道具も机とベッド、テーブルや食器に新聞といった簡素なもので、レーヴィ一座の粗末な舞台を連想させる。

『判決』誕生のもう一つの要因となったのが、およそ5年間に500余通の書簡を書き送り、2度の婚約とその解消を繰り返すことになるフェリス・バウアー (*Felice Bauer*)との邂逅である。カフカがフェリスに出会ったのは、1912年8月13日、友人のマックス・ブロート (*Max Brod*)宅である。『判決』が書かれたのは彼女への最初の手紙を出した2日後であり、この物語の献辞はフェリスに捧げられている。彼女との出会いは、カフカがこれから辿るであろう運命 — 文学と結婚のデイレンマ — を鮮明に映し出す鏡となり、強烈な文学的インスピレーションをもたらしたのである。彼は日記のなかで、ゲオルク・ベンデマンとフランツ・カフカおよび婚約者フリーダ・ブランデンフェルトとフェリス・バウアーとの名前の相関関係を克明に注釈している。

2

『判決』におけるロシアの友人とゲオルクの人物配置の原型となったのが、若きカフカの習作とも呼べる『ある戦いの記録』（*Beschreibung eines Kampfes*）である。作品は未完のまま終わり、生前発表されることはなかったが、そのなかには幻影としての生、孤独、不安、共同体への憧れといったカフカ文学の基本的モチーフの萌芽が見られる。『ある戦いの記録』はA稿、B稿と名付けられた2つの草稿が遺されている。A稿は1904年に執筆され、1907年に清書された。B稿（A稿の改稿）は1909年から1911年にかけて成立している。

A稿は3部構成になっており、内容的に連続しているI部とIII部に、物語的に独立したII部が挿入されている。小説はある夜会で知り合ったばかりの「知人」が、語り手である「私」のまえに現れることではじまる。彼は「私」が辟易しているにもかかわらず、ある娘と親しくなった経緯を誇らしげに喋りだす。「私」はラウレンツィ山への散歩を提案し、「知人」を戸外に連れ出す。だが、フェルディナント通りで冷たい夜気にふれると、「私」は「知人」と別れて、誰にも邪魔されずに自宅でくつろぐ自分を思い描く。しかし、絵模様の壁に囲まれた自室で何時間もひとりで過ごすことを考えると、気持ちが萎えてしまう。「私」は自発的に孤独を愉しんでいるわけではないのである。「私」はプラハの街を歩きながら、この「知人」は明日、あの娘アンネルルに自分のことをなんと話してきかせるのだろうと、彼の目に映った自分の姿をつぎのように空想する。「その男ときたら、まるでぐらぐら揺れている棒ぎれみたいで、そのてっぺんのほうに黒い髪のはえた頭がくっついているんだ。その身体には、たくさんのくすんだ黄色のぼろぎれがぶらさがっているんだよ。」（KN62）

彼らがふたりして辿っていくルート、すなわち新市街からプラハのメイン・ストリートであるフェルディナント通りを抜け、さらにモルダウ川に沿ったフランツェン河岸、クロイツヘレン広場を経て、両側の欄干に聖者像の立ちならぶカール橋を渡り、貴族たちが城館をかまえているクラインザイテ、そしてラウレンツィ山へと至る道筋は、当時の上流市民たちにはお馴染みの散歩コースであった。『ある戦いの記録』では、プ

ラハ実在の通りや境界の地名が頻出するが、人名は「アンネルル」と「ジェローム・ファロッシュ」を除いて、一切あられない。登場人物たちはただ「知人」、「肥った男」、「祈る男」などと呼ばれるだけである。この特徴は1914年8月に書きはじめられた『審判』（*Der Proceß*）と比較してみれば、より際立ってくる。『審判』では、人名は29種類も使用されているにもかかわらず、プラハとおぼしき街を舞台にしなが、架空の地名が一つ（ユーリウス通り）出てくるだけである。

「愉しみ、あるいは生きることが不可能であることの証明」（KN72）という見出し語がついているⅡ部は、4つの節（1「騎行」、2「散歩」、3「肥った男」、4「肥った男の最期」）で構成されている。3の「肥った男」は、さらにa「風景への呼びかけ」、b「祈る男との最初の対話」、c「祈る男の物語」、d「肥った男と祈る男との対話のつづき」の4つに分かれている。c「祈る男の物語」では、「祈る男」が戸外に出ると、月や星をちりばめた夜空、市庁舎やマリアの柱像、教会堂をもった円形広場が襲いかかってくる。彼は両手をあげて夜のざわめきをしずめ、「きみたちは、まるで実在しているかのようなふりをしているが、それはいったいどういうことなのか。私は実在せず、おかしな格好で緑の舗石に立っているのを、私に信じこませようというつもりなのか」（KN102）と瞑想する。この若者もⅠ部の「私」同様、「まるでシルエットのように黄色い薄紙から切り抜いてあって、歩くときはばりばり音がするのがきこえる」（KN97）と形容されており、どことなく輪郭がはっきりせず、投影的に描かれている。

B稿には、教会でわざと大袈裟な身振りで祈りをささげている男を捕まえて、「私」がその理由を問いただそうとする箇所がある。「祈る男」は、「愉しみじゃなくて、欲求でしょうね。ほんのしばらくのあいだ、ああいった視線をあびせられたいのです」（KN157）と答えたあと、薄笑いを浮かべてこう続ける。「ずっと以前から、あなたの視線に慰められていました。ほかの人びとのまえでは、小さなリキュール・グラスがテーブルの上に、まるで記念像のようにしっかりと立っているというのに、ぼくのまわりのものは、降る雪のように儚く消え失せてしまうのはいったいどういうことなのか、それをあなたに教えてもらいたいと思っているのです。」（KN159）つまり「祈る男」は、自己存在の希薄さを他者の

眼差しによって保証してもらうことを期待しているのである。

Ⅲ部になると「知人」はⅠ部と異なり、はじまったばかりの恋に迷い、「私」に慰めを求めてくる。それに対して「私」が、「あなたは自殺でもしなければならぬでしょう」（KN116）と告げると、「知人」は怒って、「あなたは誰からも愛されないし、愛することもできない独身者であり、ただ不安に怯えることしか、あなたを興奮させるものはないのだ」（KN117）と罵る。自分の本質を言い当てられた「私」は、この戦いの優位性を確保するために、「私は婚約しているのです」（Ebd.）と虚偽の告白をして、「知人」に決定的なダメージを与える。この一言に衝撃を受けた「知人」は、自分の腕にナイフを突き刺す。「私」は慌てふためき、「知人」の傷の手当てをして、彼と恋人が春の果樹園を楽しく散歩する幸せを語って慰める。そして最終場面では、「知人」は「私」にもたれかかり、ふたりはまるでひとりであるかのように寄り添いながら帰路につく。

「私」と「知人」の両者はひとりの人間の二つの側面であり、作者の自己分裂として生じる心の「戦い」の形象化である。この対応関係が、『判決』における「ロシアの友人」と「ゲオルク」のヴァリエーションになっていることは明白である。戦いを終えたふたりが目にするのは、雪の上の樹木の幹の影である。この情景は、B稿結末のつぎのような譬え話と呼応している。「ぼくたちは雪のなかの木のようなものだ。それは滑らかに雪の上に乗っているようだ、ちょっと突けば押しのけられそうだ。いや、そうはいかない、木の幹は大地とかたく結びついているのだから。だが、それさえもそう見えるにすぎない。」（KN166）このわずか4つの文章から成る散文は、『樹木』（*Die Bäume*）と題して小品集『観察』（*Betrachtung*）に収められている。空想に溺れる「私」も、現実を受け入れようとする「知人」も、結局のところ、確かな基盤を築いていくわけではなく、ともに実在性を喪失した「見かけ」だけの存在なのである。

3

カフカは『判決』の校正刷りを見たとき、「友人は父と息子を結びつ

けるもので、彼らの最大の共有物である」(T186)と述べている。物語の後半に入ると、ロシアの友人と密かに結託していた父親が、「ゲオルクの対立者として立ちはだかる」(T186)。ゲオルクは父を休ませるために、両腕に抱いてベッドに運んでいく。父親は自分で毛布をかけ、「うまく包まれているだろうか」(E29)と尋ねる。「大丈夫、しっかり包まれていますよ」(Ebd.)とゲオルクが返答すると、「嘘だ!」(Ebd.)と言って、毛布を宙に舞わんばかりに跳ねのけ、ベッドの上に仁王立ちになる。すると、これまで友人の存在自体を否定していた父は、「確かにわしはおまえの友人を知っている。あれはわしの心になかった息子といってもいい」(Ebd.)と言い放つ。その姿を見上げたとき、ロシアで失意のなか、孤独に生きている友人が、かつてないほどゲオルクの心を捉える。「略奪し尽されて、がらんとした店の戸口に彼がいた。打ち壊された戸棚、ずたずたに引き裂かれた商品、落ちかかっているガス燈のパイプのあいだに、彼はまだかろうじて立っていた。なぜ彼はあんなに遠くまで行かなければならなかったのだろうか!」(E30)

その後、父親が「わしはこの町における彼[友人]の代理人だ」(E30)と名乗ると、ゲオルクは「喜劇役者!」(Ebd.)と罵る。そして、「彼[友人]はすべてをおまえより千倍もよく知っているのだ」(Ebd.)と叫ぶ父に、「1万倍もでしょう」(Ebd.)とゲオルクは嘲笑するのであるが、その言葉は彼の口のなかで死の厳粛さを帯びた響きになる。この舞台性を有する物語の結末では、「凄まじい姿」(E30)の父親が、「おまえは本来罪のない子どもだった、だが、より本来的には悪魔のような人間だったのだ!」(E32)と声を張り上げ、息子に溺死刑を宣告する。このシーンは、カフカの幼年期の原体験とも称すべき「バルコニー体験」と関連付けられる。彼は自分の父親に対する恐怖を、『父への手紙』(*Brief an den Vater*)のなかでこう描写している。「ぼくはある夜、水をほしががり、むずかり続けたことがあります。[...]あなたはぼくをベッドから抱え上げ、内庭に面したバルコニーに連れ出して、ひとり閉め切った扉のまえでしばらくのあいだ、下着のまま立たせておいたのです。[...]ぼくはすっかり従順になりましたが、内的な損傷を受けました。[...]それから幾年か経ってからも、ぼくはあの巨大な男、ぼくの父親であってしかも最終審でもあるのだが、ほとんど理由もなくやってきて、真夜

中にぼくをベッドからバルコニーへ連れ出すかもしれないという思いに苛まれていたのです。」(H123)

『判決』に登場する父親は、拮抗し合うふたりの息子をまえにして、ロシアの友人を選択する。作品のなかでは、父は悪意に満ちたともとれるような言動によって、ゲオルクに自らの本性を悟らせる役割を演じている。だが、現実の父ヘルマンは文学とは無縁で、息子が自分の著書を献呈しても、「ナイト・テーブルの上に置いておくれ！」(H148)と、ほとんど無視をもって応じた。裕福な資産家の娘を妻にし、その持参金により事業を拡大させたヘルマンにとっては、むしろゲオルクのほうが「心になかった息子」なのである。

死刑判決を下されたゲオルクは、自分が部屋から追い出されるのを感じる。彼は背後で父がベッドに崩れ落ちる響きを耳にしながら、まっしぐらに河へと駆り立てられる。この場面におけるゲオルクの行動の主体は、主人公自身にも制御できない力を表す「エス(es)」(E32)へと移行されている。要するに、彼を突き動かしているのは無意識的な衝動である。凄い勢いで階段を駆け降りるゲオルクと衝突しそうになった女中は、「ああ神様!(Jesus!)」(Ebd.)と叫んで前掛けで顔を覆う。その後、橋の欄干にぶらさがるゲオルクの姿は、まさに十字架に磔になったキリスト像を想わせる。このように『判決』には、多くの聖書に関する仄めかしがあると推測されてきた。

『判決』が書かれる2か月前、カフカはユングボルのキリスト教的雰囲気濃いサナトリウムに赴いている。これは自然に抱かれた生活態度と魂の救済を求める趣旨から、1896年にハルト地方プロッケン山麓に設けられた。「自然に還る」にあたり、肉体を締めつける衣服も取り去る。また、菜食主義が奨励され、讃美歌を歌うことが日課にくわえられている。ユングボルンでの日記から、彼が朝から冷水浴、裸体体操、瞑想に参加し、午後は労働、夜の時間を執筆にあてていたことが知られる。7月13日の日記には、「食後、ぼくはいつも、ここではどの部屋にも置いてある聖書の一章を読む」(T419)とある。カフカはこのサナトリウムで、キリスト教教会から来ている測量師Hという男と親しくなり、熱心な改宗への勧誘を受けている。

『判決』の導入部において、ゲオルクが窓越しに「河や橋、薄緑に萌

える対岸の丘」(E23)へと順次、眼差しを移していく行為は、主人公の水死というクライマックスの伏線となっている。ゲオルクはこの時点で、自分を待ち構えている何か宿命的なものを予感しているのである。この物語では、ゲオルクを小市民的な世界に埋没している分身として、他方ロシアの友人を作家的形象として設定し、カフカはロシアの友人を生き残らせた。ところが、息子に死刑判決を言い渡したあと、ベッドの上で卒倒する父親(友人の「代理人」)の姿には、遠い異郷で朽ち果てようとする友人が間接的に暗示されており、カフカの「書くこと」に対する懐疑性が潜んでいるように思われる。したがって、ゲオルクは橋から水へ落下すると同時に、ロシアに繋がるような「対岸の丘」を越境し得ないで、その狭間を漂流し続けていると推察できる。実際カフカの生涯を見ると、「孤独と共同体との境界域」(T341)をほとんど踏み越えることはなかった。

* カフカのテキストからの引用は、以下の省略記号とページ数で本文中に示した。

KN=*Nachgelassene Schriften und Fragmente I*, Pasley, Malcolm(Hrsg.) New York/Frankfurt a.M. 1993.

E=*Sämtliche Erzählungen*, Raabe, Paul(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1987.

F=*Briefe an Felice und andere Korrespondenz aus der Verlobungszeit*, Heller, Erich u. Born, Jürgen(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1986.

H=*Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß*, Brod, Max(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1983.

T=*Tagebücher 1910-1923*, Brod, Max(Hrsg.) Frankfurt a.M. 1986.

主要参考文献

Demmer, Jürgen: *Franz Kafka. Der Dichter der Selbstreflexion*. München. 1973.

Dietz, Ludwig: *Franz Kafka*. Stuttgart. 1990.

Kurz, Gerhard: *Traum-Schrecken. Kafkas literarische Existenzanalyse*. Stuttgart. 1980.

Neumann, Gerhard: *Franz Kafka Das Urteil. Text, Materialien, Kommentar*. München. 1981.

Pasley, Malcolm (Hrsg.): *Kafka, Franz: Nachgelassene Schriften und Fragmente I*. Bd.II: Apparat. New York/Frankfurt a.M. 1993.

Politzer, Heinz: *Franz Kafka, der Künstler*. Frankfurt a.M. 1965.

Rajec, Elizabeth M.: *Namen und ihre Bedeutungen im Werke Franz Kafkas*. Bern. 1977.

作家カフカの誕生

Ries, Wiebrecht: *Franz Kafka*. München. 1987.

Wagenbach, Klaus: *Franz Kafka. Bilder aus seinem Leben*. Berlin. 1994.

池内紀・若林恵著『カフカ辞典』、三省堂、2003年。

井上正篤『カフカ彷徨』、同学社、2003年。

高橋行徳『開いた形式としてのカフカ文学』、鳥影社、2003年。

立花健吾、佐々木博康編『カフカ初期作品論集』、同学社、2008年。

